

2023年2月15日（水）

## 『 私のふるさとの思い出話 』

## 古野登喜夫会員

私のふるさはミイラのあるお寺として、また、美濃の正倉院といわれ、国の重要文化財 22 体が安置され、多くの絵画や書物あり、快慶作の仁王さまがあることで有名な横蔵寺がある山村です。秋にはもみじが真っ赤に色づき、観光客で賑わいます。

そんな村のつくりは、中心に村役場と農協と小中学校があり、それを四つの部落が囲み、四方を山に包まれる村です。昭和 40 年代に谷汲村と長瀬村 3 村が合併して谷汲村になりました。私はそこで昭和 22 年から 40 年まで暮らしました。今から 6、70 年近く前の思い出話を聞いてもらいたいと思います。

村のほとんどの家は林業と農業で生計を立てていました。男の人は炭焼きで現金収入を得ていましたが、昭和 35 年頃からプロパンガスが普及してきて、それまで売れていた炭もぱったりと売れなくなり、村の外へ仕事を求めて出て行くことになりました。家の作りはほとんどが茅葺<sup>かやぶ</sup>きです。家の入り口に牛小屋があり、家族の一員として牛と一緒に生活していました。牛は田畑も耕す原動力であり、また、子牛を産んでくれ、現金収入の助けもする貴重な存在でした。

私も中学生の頃から牛を使って田んぼを耕すことができました。その頃は学校で、田植えと稲刈りの農繁期にそれぞれ 3 日間ずつ学校を休んで家の手伝いをしたものでした。今では考えられないことです。昭和 20 年代頃は大変雪深い時代でした。冬の時期はずーと溶けずに雪があった気がします。というのはこの村にスキー場があったのを知っている方はいますか。名前は谷汲スキー場とっていました。谷汲から岩坂峠を越えて、今はトンネルができていますが、その峠を越えた村の入口のところにありました。大変賑わっていました。炊き出しのお店もあり、そんな中、外人も滑りに来ていました。初めて見る白人に大変びっくりしたことを覚えています。私も小学校 4 年生頃まで滑りに行っていました。といってもスキー板は竹を切ってきて、それを半分に割って先を火であぶり、曲げただけの簡単なものでした。そんな遊び場のスキー場も 5 年生のとき、昭和 30 年頃には閉鎖していました。その頃から雪の降る量が少なくなり地球の温暖化が始まっていたのかもしれませんが。そんな話を 90 歳になるねーさんと話していたら、ねーさんがいうには、私の学校の頃は戦争中で、学校にも行かずに毎日、そのゲレンデを掘り返して、サツマイモ作りをやらされたと苦笑いをしていました。

そんな冬の時期は、雪のため炭焼きに山に入ることができません。村全体が休眠状態です。昼間から酒に酔って、ふらふらしている大人がいたる所にいました。そんな大人たちの楽しみというか仕事は、イノシシ狩りです。雪がドカンと降って大雪になったときが狙いどきです。雪が深いときは、すぐにイノシシが見つかり、雪深いので逃げ足が遅いので捕まりやすいそうです。イノシシ狩りのため、私の家の鴨居には槍が掛けてありました。まるで石器時代のような感じです。そんな狩りですから、イノシシの牙に桃を突かれ、一冬棒に振る人もいました。そんなで村の広場には 10 頭近くのイノシシが、羽瀬にぶら下がっていました。それが冬の当たり前の風景でした。

そんなイノシシで思い出した面白い話があります。秋の実りの時期、稲がたわわに実る頃にそれを食べるに山から家族連れでイノシシが田んぼにやってきます。そんな時期、獅子番といって山小屋に泊まって、イノシシがきたら大声を出して追い払う仕事がありました。その仕事はリタイヤしたじーさん、ばーさんや若い衆の仕事です。で、私のひと回り上の兄がそれに出かけて何をしていたのか、山小屋を燃やらかしてしまい、用水の水



をかけたけど手遅れだったようで、夜中に顔中真っ黒にして帰ってきたことを思い出しました。

そんな兄たちも同じ世代の仲間がいっぱいいました。青年団と称して夜な夜な公民館に集まり、よからぬことをしていたようです。その頃は米はひと晩かけて、どの家も水車小屋で突いていました。そんな水車小屋は、夜、誰も来ないので、よく失敬して食べたもんだと言っていました。また、別の日のことです。ある朝、起きたらいつもうるさい近所の犬がいません。首輪だけ残して、どれだけ呼ばっても帰ってきません。それもそのはず、前の晩、その犬は欠食青年団の腹の足しになってしまいました。戦争中の食べるもの少なかった時代の哀れな犠牲者です。ごめんなさいね、南無阿弥陀、南無阿弥陀。そんな元気いっぱい青年団の皆さん、まだ、その頃は夜這いも盛んだったようで、あんたゆんべも来たやん、また来たの、しょうがない、まーあがりんさいと、のどかに夜は過ぎていったようです。

そんな村にも時代の波がやって来ました。テレビジョンがやってきたのです。村一番の金持ちの家です。材木店をやっている家です。村中が大騒ぎといったところです。大相撲や力道山が出るプロレスに座敷いっぱいの人ばかりで、夜遅くまで見させてもらったものでした。

その頃、家族構成は戦争中からの国の方針で、生めよ増やせよで、8人9人の兄弟がいて当たり前でした。そんなことで横蔵小・中学校の生徒数は150人近くいました。今の時代、とても考えられない生徒数です。過疎化が進み、若い人はみんな村を出て、今は村全体で子どもが10人いるかの時代です。私の同級生も男子20人、女子11人の31人で、中学校卒業するまで変わることはありませんでした。

そんな子ども時代の遊びは、外で子どもたちで遊ぶことです。家の中にいると外へ行って遊べと叱られたものです。勉強しろと言って叱られることはありませんでした。ほとんど野生人で暗くなるまで遊んでいました。で、夏は堰堤えんていの下に20メートル四方ぐらいを石で囲いを作り、腰ぐらいまでの水たまりで1日遊んだものです。また、流し針ながしといって水系に針をつけ、ドジョウをつけウナギとりです。昼間に仕掛けて、明るる朝早くに仕掛けバりにウナギがかかっているかを見に行きます。そのときの興奮はなんともいえません。50本くらいかけて1本とればそれでいいんです。昼間はアマゴのしゃくり取りです。四角い升到にガラスを張った水鏡で水中を覗いて、しゃくり棒で魚を引っかけるのですが、とても難しい技術です。お地藏さんまつりと横蔵寺の御開帳のとき、相撲大会が開かれます。景品目当てに子どもも大人も頑張ったものです。その御開帳は8月20日に行われるのですが、その頃はお盆の15日より二十日はつかといって、その日に里帰りをする人や隣町や隣村から親戚が集まり、8畳2間がお客さんで一杯になり、村が一番賑わうときでした。また、夏の夜の映画大会も大変心待ちしたものです。といっても野外に竹竿を2ほん立てて、それに天幕をつなげるだけの即席の映画館です。そこで嵐勘十郎の時代劇に興奮して見たことを思い出します。皆さん、旅回りの芝居一座を見たことがありますか。大人から下の小学の低学年まで10数人の団体です。10日間くらいはいたと思います。私の家の裏手のところに蚕室という大きな小屋がありました。そこは戦前共同で蚕さんを育てていたそうです。そこを公民館代わりに使っていました。そこへ旅の一座が寝泊まりして、夜にお芝居を見せるのですが、戦前はよく来たらしいんですが、そんな旅回りが来たのも私が2年生の頃、それからはパタリと来なくなりました。時代の流れなんではなかね？そんな一座の役者に惚れてしまった、村娘が駆け落ちしそうになったとか、今も昔も芸能人には弱いようですね。

そんな戦中戦後の時期、部落の入り口に見張り小屋がありました。混乱の時代、村を守るのは自分たちしかいません。駐在さんは隣町にしかいません。不審人物が現れたと情報が入ると屈強な大人が5、6人交代で昼夜見張り番をしたと聞いていましたが、私が小学3年生、昭和27、8年の頃には、役目を果して朽ち果てていました。そんなわけで、学校帰りの格好の遊び場になっていました。

あの時代、中学を卒業すると大半は就職する人が多く、進学率の低いときでした。どうしても勉強したい人は夜間高校へ通う人もいました。私は進学することができました。その頃は、揖斐高校か本巣高校しか通えませんでした。揖斐高まで30キロ位を自転車を通いました。道路はまだ未舗装で、岩を砕いた採石でならし

てあるだけの道で、普通のタイヤではすぐに切れてパンクしてしまいます。それで太いビスモーターのタイヤをつけて通いました。町の友だちはなんじゃこれと驚いていましたが、それでも年に1、2回はパンクします。そうしたら引っぱっていくしかありません。途中の自転車屋で直してもらい、そんな日は2時間遅刻でした。そんな自転車通学も毎朝7、8人が先輩の家へ集合してから出発していました。揖斐峡を通っていくのですが、川上で横山ダムを建設中で、毎朝5、60台近くのダンプカーが通ります。そのホコリのすごさ、北方町に着くとやっと舗装された道に出て、そこで毎日のホコリ払いが始まります。とにかく学生服が真っ白になっているので帽子で払うのです。

そんな揖斐峡は、そのあたりでは唯一の観光地で、若いアベックのデートコースとして、とても賑わっていました。料理旅館が2、3軒あり、船遊びもでき屋形船もありました。あるとき、酒に酔った人が船から落ちて行方不明になりましたが、1週間ぐらい後の通学中の朝、土左衛門になって浮いているのを見ました。体内にガスが溜まると浮いてくるそうです。

その毎日集まる家が、“つるつる、うまうま”でおなじみの若鯨家の創業者 高橋君ちでしたが、彼は60歳前に病気で亡くなったと聞きました。その妹にみちゃんというとてもかわいい子がいました。なにを隠そう、実は私の初恋の人でした。

野辺の送りについて話します。それは葬儀が終わり埋葬地まで死者を送る葬列です。その頃、葬儀は部落あげての一大行事です。死者が出たら向かい側の屋敷は埋葬地の穴掘りが担当です。2メートルくらい掘り起こすと何年も前に死んだ人の骨が出てくることは当たり前でした。当時、この村は土葬が当たり前でした。隣町などでは火葬が進んでいたようですが、そんな葬式が出た屋敷は、死者が出た当日から大忙しです。葬式料理の材料買い出しに出かけるもの、最も大事な役目は長老によるシキョウブレといって近隣の村や町の親戚への葬儀日程を知らせてまわることです。今のように電話も自家用車もない時代で、足だけが頼りの頃ですから。また、他のものは葬列に使う棺桶に始まり、和紙で作る額<sup>ひたい</sup>につける三角巾、竹竿につける短冊など、葬列に使う小ものいろいろを作るのに、そして、お通夜の晩は屋敷10軒の大人が寝泊まりします。ある意味、悲しさを忘れるくらいの賑やかさでした。ちなみに私の部落は坂本、中屋敷、ドシンプラ、むかいらとそれぞれが10軒ずつで成り立っていました。その屋敷の結束は大変固いものがありました。何か問題が起きるとすぐに集まり、寄り合いといって相談をしていました。葬儀が終わり、いよいよ野辺の送りです。竹竿に短冊ののぼりを先頭におりん、かね、太鼓、シンバルを使い行進します。その音は、チン、ぽーん、かーん、ジャバジャバ、とその音に導かれてお墓まで行進します。まるで時代物の映画の一場面のようなものでした。そんな葬儀で父親を送り出したことを思い出します。それが最後で、今は揖斐川合同斎場での火葬に変わりました。

9年間、横蔵小中学校で一緒に過ごした31人の仲間もそれぞれの道に進んでいきましたが、何の因果か運命か、同級生3人が6年後にある1か所に呼び寄せられました。それは昭和43年10月21日、年配の方はその現場にいたかもしれません。それは新左翼の学生による暴動事件、新宿騒乱です。新宿駅周辺での中核派らによるデモ行進、破壊活動、新ちゃんは中核派活動派の幹部として、尚ちゃんは警視庁の警官で交通整理、正広君は愛知県警から出動の機動隊として、新宿の歩道橋の上から拡声器で演説する新ちゃん、その下では学生の暴走を止めようと、盾を2枚合わせと2人がかりで食い止める役回り、全く生きた心地がしなかったと、同窓会のときに話していました。そんな新ちゃんも後の内ゲバで命を狙われる羽目になり、1年近く東京山谷のドヤ街に身を隠していたと本人の口から聞きましたが、その後、日商岩井に勤め、商社マンとして活躍し、バブルのときなどはジェット機飛ばしてフロリダまでゴルフをしに行っただと自慢げに話していました。コロナ前までは東京からお盆帰りの新ちゃん、尚ちゃんらと毎年、大垣カントリーでゴルフをして昔話に花を咲かせました。